様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００９６４

研究課題名（和文）真福寺所蔵の中世神祇書の研究

研究課題名（英文）A Research Study of Medieval Shinto Texts Archived at the Shinpukuji Temple

研究代表者
トレンソン　スティーブン（TRENSON, STEVEN）

早稲田大学・国際学術院・准教授

研究者番号：１０５９５４３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中世日本における密教と神道の交流について考察した。特に、中世神道が思想的にどの程度まで醍醐寺の密教と関係し合っているのかを検討した。中世神道の信仰は多種であるが、その中で灌頂儀礼がある。それは師が弟子に対して天皇や神々について様々な秘説を伝えることによって弟子を解脱させるという特殊な儀礼であるが、本研究の結果、醍醐寺法流の影響を受けた中世神道の灌頂儀礼において仏舎利（宝珠・龍）の信仰だけではなく、仏母（仏を生み出す智慧）及び玉女（仏教の理想上の王の妃）の信仰も重視されていたことが判明した。これは中世神道における性と王権という課題を考えるためには重要な研究成果であると言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、中世日本における密教と神道の交流について考察するものであり、特に、密教学界で問題とされている醍醐寺の密教と中世神道との関係に一光を投じることを目標とした。研究目標を果たせるために即位灌頂及び神祇灌頂の世界に絞って考察を進めた。その結果、醍醐寺の密教も中世神道も『瑜祇経』の経説を重要視した点が判明した。具体的に言えば、『瑜祇経』は愛染王が仏母でもあり、仏・菩薩及び国王の妻（つまり、玉女）でもあると主張するが、中世密教の即位法はその仏母信仰を取り入れていた。これは中世密教における性と王権という問題及び『瑜祇経』の意義を再考することを促す重要な発見であると言える。

研究成果の概要（英文）：The present research focuses on the relationship between Esoteric Buddhism (Mikkyo) and Shinto during the medieval period in Japan. Concretely, it aims to clarify how medieval Shinto thought relates to the esoteric tradition of Daigoji. There are various beliefs and practices that characterize medieval Shinto, but one type of belief or practice that is especially interesting for the purpose of this study concerns the different types of abhisheka initiation or consecration rituals (kanjo). These are rituals in which a Buddhist master transmits various secrets about the emperor of Japan (tenno) and the Japanese gods (kami) to a disciple, to show the disciple the way to awakening. The present research revealed that the Shinto-related consecration rituals influenced by the esotericism of Daigoji emphasize the notions of the Buddha-Mother (butsumo) and the Jewel Woman (gyokunyo), besides relic and jewel beliefs.

研究分野：日本宗教史

キーワード：密教　中世神道　即位灌頂

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は中世日本における密教と神道の交渉について考察するものである。日本宗教史の分野では密教と神道が混淆した諸信仰を「中世神道」と呼ぶことがあるが、研究を開始した時点では、醍醐寺の密教と神祇信仰の関係の究明が中世神道の研究における一つの大きな課題とされていた。中世神道は十二世紀末～十三世紀初頭より形成しはじめたと考えられているが、その思想の歴史的展開について不明なところが未だたくさん残されている。だが、研究を開始した時点において、真福寺所蔵のテキストから、すでに十二世紀末までに醍醐寺の密教（醍醐寺法流）の中に中世神道の諸信仰が成立していた可能性があることがうかがえる。しかし、はたしてすでに十二世紀末という早い時期に醍醐寺法流内で中世神道が芽生えていたかどうかは疑わしく、その可能性がどこまで当を得ているか定かではない。よって、醍醐寺の密教と中世神道が思想史上どのように繋がっているのかを研究することに決めたのである。

２．研究の目的

「１．研究開始当初の背景」で述べたように、中世神道の研究分野において、中世神道の思想史における醍醐寺の密教の意義や役割がどの程度のものであるかを究明することは重要な課題とされている。この課題が究明されない限り、中世神道がどのようにして日本の中世社会において展開したかという過程だけではなく、その思想的特徴の多くも不明なままになってしまう。よって、本研究で醍醐寺の密教と神道（特に真福寺に所蔵されている神祇書の神道説）の関係を検討することによって、未解決な問題が多く残っている中世神道の研究に貢献をし、日本宗教史のこの分野に一光を投じることを目的とする。

３．研究の方法

以上の研究目的を果たせるために、次の研究方法を採用した。具体的に、上述の研究課題（醍醐寺法流と神道との関係）を次の二つの視点から考察した。それは、①醍醐寺法流の舎利・宝珠信仰という視点、②中世神道の諸信仰を代表する即位灌頂及び神祇灌頂の世界という視点である。以下、それぞれの視点をもう少しより詳しく説明しよう。

（1）筆者は過去の研究において醍醐寺の密教についていくつかの論考を発表し、それらの論考において仏舎利、如意宝珠、龍王（龍神）の信仰が醍醐寺法流の根幹を占めているという点を論じた。それは醍醐寺法流（小野流とも）が雨乞儀礼（請雨経法）の伝統を受け継いでいた事実と深く関わっている。雨乞儀礼では舎利・宝珠・龍が最も重要な信仰だからである。醍醐寺の密教は無論雨乞儀礼を中心のみに展開したのではないが、歴史的に醍醐寺の密教が広く貴族社会に名声を得るようになったのは醍醐寺僧による雨乞儀礼の功績のおかげである。そのために醍醐寺の名僧は舎利・宝珠・龍の信仰を当寺の密教の頂点に据え、その上、その信仰に基づいて鎮護国家や成仏などの構想を再構築した。また、同じ信仰を当寺の鎮守（守護神）である清瀧神という龍神にも投影した。要するに、清瀧神は醍醐寺における密教と神道の架け橋となっていたのである。しかし、醍醐寺の密教はかなり複雑な思想体系であるために、本研究では以上の研究目的を達成させるためにさらに醍醐寺の密教の表面を掘り下げてその特徴を考察した。

（2）中世神道は、密教の視点から神祇信仰や神祇神話を見直す宗教体系であり、その思想的内容は多様である。そこで、効率的に醍醐寺の密教と中世神道の関係を検討するために、多様な中世神道の諸信仰の中で特に重要である即位灌頂及び神祇灌頂という儀礼に絞ることにした。即位灌頂（即位法）は、真言宗と天台宗を問わず日本密教の諸流に確立し、狭義的に天皇が即位の際に密教の印を結ぶ所作を指すが、天皇の祖神である「アマテラス」と「三種の神器」（剣・勾玉・鏡）という神祇神話上の要素を含む儀礼である。神祇灌頂は、中世の様々な神道流の中に成立し、日本の神々についての密教秘説が伝授される儀礼であるが、即位灌頂と同じく思想的に天皇の三種の神器を中心として展開した儀礼形態である。

即位灌頂についてのテキストとして天台僧の慈円（1155～1225）の夢想記がある。その夢想記において慈円が三種の神器についての秘説を述べているが、それによれば、三種の神器の内の剣が不動明王または一字金輪（天皇）、勾玉が仏母または玉女（皇后）、鏡が大日如来またはアマテラス（皇太子・新天皇）に対応するという。しかし、醍醐寺法流の中にも即位灌頂の秘説が伝わっていた。ただし、先行研究によれば、醍醐寺の即位灌頂は思想的にダキニ天または歓喜天の信仰を取り入れており、一見慈円の解釈と異なる構想である。そして神祇灌頂に関しては、たとえば三輪流神道の場合、剣が不動明王、勾玉が愛染王、鏡が如意輪観音（または舎利・宝珠・龍）であるという説がある。こうして、即位灌頂・神祇灌頂の世界には一貫した信仰がなく、関連性のない様々な説があるようにみえる。本研究では、醍醐寺の即位灌頂の諸説を再検討し、それらの諸説が思想的に中世神道（神祇灌頂）とどのようにリンクしているかを探った。

４．研究成果

まずは、新型コロナのパンデミックの影響により当初の研究計画を大きく変えざるを得なかったということを言わなければならない。コロナ禍により真福寺の神祇書を調査することが困難となったが、すでに公開されている真福寺の神祇書の内容を手掛かりとして、「３．研究の方法」で述べた通り、醍醐寺の舎利・宝珠信仰、また醍醐寺の即位灌頂と中世神道というふうに、少し焦点を変えることによって研究の目的を果たそうと決めたのである。その結果として次のような研究成果を生成することができた。

（1）醍醐寺の密教において仏舎利・如意宝珠・龍という一連の信仰が重要な位置を占めているが、その信仰の基盤は空海撰と言われる『御遺告』という書にある。この『御遺告』の舎利・宝珠信仰について未解決な問題が多いため、本研究において『御遺告』の成立年代について考察し、その舎利・宝珠信仰の源泉を考究した。その研究成果を収めた論文は 2023 年 6 月に国際誌『The Eastern Buddhist (Third Series)』(3/1) に発表された（題名：「The Black Jewel of Shingon Tradition: A Historical Examination of Its Emergence, Characteristics, and Associated Rituals」)。この論文では、『御遺告』の舎利・宝珠信仰がすでに十一世紀前半までに成立したという点を論証し、従来全く不明であった『御遺告』所収の人造宝珠作成方法の出典を明らかにした。その出典は『大仏頂広聚陀羅尼経』（大正蔵 No.946）における道教の錬金術に似る密教作法である。『御遺告』の人造宝珠は真言密教における最も重要な要素の一つであるため、その作成法の出典の解明は密教学に大きく貢献する重要な発見であるといえる。

（2）直接には本研究の課題と関係がないが、中世神道の諸側面を研究する段階で中世神道と前近代の武術の間に接点があることに気付き、その接点について論文（「Buddhism and Martial Arts in Premodern Japan: New Observations from a Religious Historical Perspective」『Religions』 13(440)）を発表した。具体的に、室町時代に御流神道（中世神道の一流派）の父母代灌頂の思想が弓術に取り入れられた事実を明らかにした伊藤聡の研究（『神道の形成と中世神話』吉川弘文館、2016 年）を踏まえながら、江戸時代の弓術諸流の伝書にも同じような中世神道的な言説がみえることを示した。さらに、前近代武術の伝書に「一心」という概念が重んじられる点を指摘し、その思想的特徴を論じた。

（3）本研究の主要な研究成果は、即位灌頂に対する新解釈である。すでに過去の科研費の研究（研究課題番号：26770220）で即位灌頂における「仏母信仰」の重要性を指摘したが、その研究を収めることが予定されていた図書は編集者の事情により発行中止となったということもあって、今回の研究でさらに仏母信仰の意義を考察した。結論を言いますと、醍醐寺の密教の即位灌頂は、密教の主要経典の一つである『瑜祇経』の仏母信仰に基づいている。『瑜祇経』の仏母信仰は密教学でよく知られているが、従来の研究で見逃されているのは、同経典が、仏母の一つである愛染王（金剛染）を仏・菩薩及び世間の王の「妻」としているということである。仏教では、仏教を保護する王を「転輪聖王」と呼び、その聖王の妻后を「玉女」と呼ぶが、この仏教の基本的な信仰に従って、愛染王が仏母としてだけではなく玉女としても見られていたということが分かる。そして醍醐寺法流の即位灌頂（「即位三宝院嫡々相承大事」）の分析により、その即位灌頂において歓喜天ではなく愛染王の信仰が中心となっていた点も判明した。この発見は、慈円の夢想記の内容を見直すことを可能にした。すなわち、夢想記に仏母と玉女が言及されているということは、その裏に同『瑜祇経』の仏母・玉女信仰が潜んでいることを暗示しているのである。因みに、醍醐寺法流では即位法の異説としてダキニ天の信仰がクローズアップされることもあるが、ダキニ天が愛染王と深い関係にあることは密教学によく知られている事実である。

醍醐寺法流の即位灌頂が愛染王信仰に裏付けられていたという発見は、即位灌頂の意義と性格に新たな光を投じることを可能にする。具体的に次の点を挙げることができる。

① 天台宗と真言宗を問わず、中世日本の即位灌頂の世界は「性」（性欲）を課題にしていた。慈円の夢想記は天皇（不動）と后（仏母・玉女）の交会が次代の天皇（アマテラス・大日）を生み出すと言い、つまり、その交会が「清浄」であると言うが、醍醐寺の即位灌頂でも、天皇と后の交会が歓喜（愛染王）を起すと言われている。また、中世天台宗の即位法を裏付ける慈童説話にも性の問題が出て来るが、ここではこれについて詳述しない。なぜ即位灌頂の世界で殊更に「性」がハイライトされているかというと、『瑜祇経』で仏・菩薩が愛染王（性欲の止揚を象徴する密教の尊格）を「妻と為している」と説いているからである。密教僧に解脱するために性欲の克服が要求されると同様に、天皇にも、聖王になるために清浄性が必要とされる。即位灌頂の世界では、その清浄性が性欲の止揚を象徴する仏母・玉女（またはその仏母・玉女を代表する人）との融合により実現するとされていたのである。

② 従って、一見中世日本の種々の即位法が一貫性を欠いているようにみえるが、周到に分析してみれば、その種々の即位法に主演している原理が「性」の問題と深く関わっている『瑜祇経』の「仏母・玉女」信仰であると言える。

以上の研究をまとめる論文は未完成であるが、今年中国際誌『Religions』の特集号（「Esoteric Buddhism in East Asia: Texts and Rituals」）に発表される予定である。

（4）このように、醍醐寺の密教が中世神道とどのような関係にあるかと言えば、次のようにまとめることができる。醍醐寺の即位灌頂は『瑜祇経』の仏母・玉女信仰に立脚し、性欲とその克服・清浄化を課題としていたが、それは天台宗の即位法と共通していると言える。また、醍醐寺法流は舎利・宝珠信仰を重要視していたが、密教では「仏母」が般若波羅蜜（空性）、般若波羅蜜が「国王の父母」及び「龍の宝珠」（『仁王経』）とされていたということを忘れてはいけない。要するに、仏母信仰と龍神信仰は深い関係にあるのである。本研究により、中世神道を代表する即位灌頂も神祇灌頂も『瑜祇経』の信仰及び愛染王信仰を取り入れていた点が判明したが、その信仰は龍神信仰でもあるために、中世神道の発展・展開に醍醐寺の龍神信仰が大きな影響を与えたと推察される。ただ、その論点を裏付けるために今後さらなる研究が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Steven Trenson	４．巻 3/1
２．論文標題 The Black Jewel of Shingon Tradition: A Historical Examination of Its Emergence, Characteristics, and Associated Rituals	５．発行年 2023年
３．雑誌名 The Eastern Buddhist (Third Series)	６．最初と最後の頁 27-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Steven Trenson	４．巻 13 (440)
２．論文標題 Buddhism and Martial Arts in Premodern Japan: New Observations from a Religious Historical Perspective	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Religions	６．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/rel13050440	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Steven Trenson	４．巻 47(1)
２．論文標題 Review of Gaetan Rappo, Rhetoriques de l ’ heresie dans le Japon medieval et moderne: Le moine Monkan (1278-1357) et sa reputation posthume.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Japanese Journal of Religious Studies	６．最初と最後の頁 177-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Steven Trenson	４．巻 45
２．論文標題 Rice, Relics, and Jewels: The Network and Agency of Rice Grains in Medieval Japanese Esoteric Buddhism	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Japanese Journal of Religious Studies	６．最初と最後の頁 269-307
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18874/jjrs.45.2.2018.269-307	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 Steven Trenson
2．発表標題 The Dragon and the Kami: Exploring the Connections Between the Esoteric Buddhist Tradition of Daigoji and Medieval Shinto
3．学会等名 19th Congress of the International Association of Buddhist Studies (IABS), Aug 15-19, 2022, Seoul, South Korea（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Steven Trenson
2．発表標題 The Divine Mother and Consort: A New Perspective on Medieval Japanese Esoteric Buddhist Visions of Sacred Kingship
3．学会等名 International Symposium "Objects, Texts, and Rituals: Multi-Disciplinary Approaches to the Transmission of Esoteric Buddhism," November 18-19, 2021, National Chengchi University, Taiwan（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Steven Trenson
2．発表標題 The Dragon and the Emperor: Rainmaking and Divine Kingship in Medieval Japanese Esoteric Buddhism
3．学会等名 AAS 2021 VIRTUAL Annual Conference (March 24, 2021)（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Steven Trenson
2．発表標題 The Quest for Truth and Invective Behavior in a Buddhist Context: Focusing on Two Salient Cases in Medieval Japanese Buddhism
3．学会等名 International Workshop "Invectivity: A New Paradigm in Cultural Studies?", Waseda University, Tokyo, Japan (April 2, 2019)（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Steven Trenson
２．発表標題 The Question of “Perverse Teachings” (jakyo) in Medieval Shingon Discourse: Focusing on Sexual Symbolisms in the Daigo and Ono Lineages
３．学会等名 The 3rd EAJS Conference in Japan, University of Tsukuba, Tsukuba, Japan (September 14, 2019)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Steven Trenson
２．発表標題 The Quest for Truth and Invective Behavior in a Medieval Japanese Buddhist Context: Original Enlightenment Thought as a Form of Postmodern Relativism
３．学会等名 International Workshop "Insults, Hate Speech, and Denigration Invective Communication and the Dynamization of Social Order", Universite Libre de Bruxelles, Brussels, Belgium (February 3, 2020)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Steven Trenson
２．発表標題 Relic, Ritual, and Enlightenment: The Establishment of Jewel Rituals in Medieval Shingon Buddhism and the Role of Relics in the Realization of Bodily Buddhahood
３．学会等名 International Conference "Esoteric Buddhism and East Asian Society", University of British Columbia, Vancouver, Canada (March 8, 2020)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Steven Trenson
２．発表標題 米・舎利・宝珠－中世日本の密教における米粒のエージェンシーとネットワーク
３．学会等名 法政大学国際日本学研究所－新しい「国際日本学」を目指して（５）（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Claudine Bautze-Picron, Rob Linrothe, Megan Bryson, Steven Trenson, Bryan Levman, Kaiqi Hua, Max Deeg, et al.	４．発行年 2018年
２．出版社 Brill	５．総ページ数 454
３．書名 Buddhist Encounters and Identities Across East Asia (Dynamics in the History of Religions)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関